

徳源寺の涅槃銅像について

川 口 高 風

一、はじめに

明治三十年から四十年頃の日本は、憲政党による日本最初の政党内閣を経て、伊藤博文を総裁に旧自由党勢力を母体とする立憲政友会が成立し、明治立憲制下における政党政治形成の基礎が作られた時である。また、対外政策は欧米先進国と国際社会で対等な地位を確立するとともに、朝鮮半島を勢力圏におさめる政策が進められた時でもあった。特に同二十七年、八年の日清戦争の勝利により、海外植民地を持つ国として東アジアの国際政局に影響力を持つようになった。ついで、同三十七年、八年の日露戦争の勝利によって朝鮮の支配権を確立した日本は、帝国主義列強の一

員に加わったのである⁽¹⁾。

では、当時の仏教学界をみると、真の学術的意味における仏教学完備の時代といえ、仏教学は印度哲学と並んで歴史、哲学的研究を進めねばならず、梵語学、宗教学も研究の対象とせねば真の学究的進展は計られないと考えられた時であった。したがって、この期間は仏教学研究の基礎を築きあげる準備を行った時代といえよう。また、日清、日露戦争後のため、海外への進出に礎石を置いた時代であり、中央アジア探険発掘事業などが行われ、日本仏教が世界へ進出する先駆をなした時代でもあった⁽²⁾。

このような時代に、名古屋の仏教界では大きな話題が二つ生まれた。その一つは、釈尊の仏舎利が日暹寺（現在、

徳源寺の涅槃銅像について（川口）

徳源寺の涅槃銅像について（川口）

日泰寺。千種区法王町）を建立して祀られたこと。もう一つは丈六の釈迦涅槃銅像が徳源寺（東区新出来）に安置され祀られたことである。当時の日本のビッグニュースであったが、その後は余り話題にならず、その沿革などを知る人も少なくなつた。そのため、ここに徳源寺の涅槃銅像をとりあげて考察してみたい。

二、飯田道一の略伝

飯田道一については、明治四十四年三月に原田鎗三氏が道一の功を後世に残すべく『梅干和尚』を著わし、中京婦人社より刊行した。その後、昭和五十九年十二月には出身地の稲沢市教育委員会が政治、行政、文教、宗教、芸術、医療、産業、経済などに功績のあつた九十二人を収録して『郷土の人物誌』（稲沢市教育委員会）を刊行した。その著作の二十九頁に宗教人の一人として道一がとりあげられ、稲沢市出身の有名な人物となつた。さらに、平成三年十月三十日に発行された『角川日本姓氏^{歴史}大辞典』（角川書店）の「第三章 愛知県の人物」のい項（四一〇頁）にもとりあげられている。

そこで、右の資料を中心にして略伝をながめてみよう。道一は天保三年^③（一八三二）に飯田与左衛門の次男として、中島郡稲葉村（現在、稲沢市）に生まれた。幼名を吉三郎といい、後に常十郎と改めた。幼少から豁達で、小事にはあくせくせず、いつも大胆にふるまっていた。しかし、細心の注意もしており、情は深い人であつた。

飯田家は稲葉村の旧家、豪家であつた。父の代に材木業を営んだが、木曾山を買入れたのが不幸にも目算がはずれ、家運は傾いた。父は失望落胆のため、道一が六歳の時に亡くなり、三年後には母も亡くなつた。残された三人兄弟は叔父、伯母の世話になつた。しかし、不幸は続き、兄は道一が十五歳の時、姉はその翌年に亡くなり、十六歳の道一は人生の無常を感じるとともに家業を継ぎ、飯田家の再興をはかつた。尾張名物の宮重大根の切干をはじめ農産物売って暮らしていたが、残念ながらその努力も報われず、人生の悲惨の極に達した。そこで、道一は飯田家再興のことはあきらめ、出家得道の志が起り、家名や財産などすべてを従兄に譲り、故郷に別れを告げて江州膳所の桃源寺（大津市西庄）に行き、松庵和尚について得度し道一と

改めた。その後、桃源寺を去って京都の相国寺の師家越溪禅師の徒となり、明治七年に越溪が妙心寺僧堂を開創した際に妙心寺へ入った。その後、但馬国朝来郡世希土村に陽岐庵を開き、越溪を請して大衆の接得に努めた。ところが、越溪が遷化したため、明治二十六年七月には陽岐庵を閉鎖した。その後、京都の萬松寺（京都市上京区御前通一条下る東堅町）に足を留め、郷里の稲沢町とを往復して専ら法談に努め、廃寺の再興や道路の改修にも力を尽した。その間にインドへ赴いて釈尊の靈跡を訪ねたい志が起り、「天竺三仏蹟靈塔興復 大日本大願志供養講」を作って寄附を募った。その結果、一千余円の資金を得たため、京都西加茂の靈源寺（京都市北区西賀茂町北今原）の釈守愚とともに渡天しようとしたところ、日本と清国の宣戦が始まり、行くことは不可能となった。しかし、道一は渡天の志をあきらめず、千辛万苦をものとせず、荷車を引いて家毎に梅干を乞い歩き、四斗樽を二百余り集めて陸海軍に献納した。それ以来、人々からは梅干和尚とも呼ばれるようになった。

明治二十九年九月に日清両国の平和条約が結ばれたた

徳源寺の涅槃銅像について（川口）

め、道一は再び渡天の宿願を果たすべく志を持ち、九月十六日に釈守愚とともに三年間の予定で神戸を出発した。門出を祝うものであったが、道一は大本山の妙心寺には死亡届を出して行った。神戸を出発した船は海路、馬関、香港、新嘉坡、ピナンランゲンを経て、十月十日午後五時にインドのカルカッタ港に着いた。道一は仏陀迦耶へ行き、止留して万灯供養を行う予定であったが、当時のインドは大凶作にみまわれ、食べ物に事欠くありさまであった。また、言語は通じず、風俗にもなれなかつたため、道一の志は貫徹するすべもなく、百余日で帰国せざるを得なかつた。この百余日は道一の伝記中で最も光彩のある所であったが、その旅行日誌と思われるものが興正寺（昭和区八事本町）の八事文庫に所蔵する。しかし、それが道一自からの手記であるか、それとも別人の書き写したものかは明確でない。その理由は、八事文庫蔵の「天竺三仏蹟巡拝日誌」と『梅干和尚』三十三頁以下に所収されている日記が同じ文ではないためである。したがって、八事文庫蔵の日誌以外にも日記が存在し、それが『梅干和尚』にとりあげられたのであった。なお、遷化後、遺品は道一の希望によつて

徳源寺の涅槃銅像について（川口）

徳源寺に納められたが、その品目には日記が掲げられていない。

道一はインドに滞在中、拘尸那喝拉の涅槃像の図を縮小したものを得て帰国した。しかし、帰国は本意でなかったところから、その志を完遂するため、名古屋市中区前津小林中に拘尸那喝拉涅槃堂の仮堂を建設して千日間の大供養を行った。そこで、拘尸那喝拉涅槃堂に安置している尊像にならって丈六の涅槃像の鑄造を発願し、自から荷車をひき、大鐘をたたきながら寄附を募り、全国の信徒から古鏡や古銅器など八百余貫の寄附を得た。そこで、京都の田中紋弥に木形を彫刻させ、名古屋の岡谷惣助に鑄造を依頼した。しかし、岡谷は京都の鑄物師西村与左衛門に鑄造させて涅槃像を完成した。道一は大変喜び、これを名古屋市白川町の誓願寺に運んで、安置する所を決めようと相談した。当然、全国の人々に勧募を願う寄附によって安置するはずであったが、日露戦争が起り頓挫してしまった。しかし、七十五歳の道一は老軀にむちうって、再び梅千の募集を行い、戦地へ二年間送った。明治三十九年にはようやく平和が訪れ、日露戦争は終ったが、涅槃像安置の場所は未定

のままであった。翌四十年より四十二年の前半の間までに二千余円の寄附を得たところから、寄附金の一部は鑄造費の内入として岡谷惣助に支払いし、尊像を移して名古屋郊外の八事山に安置しようとした。残念ながら八事山には安置されず、名古屋市東区新出来の徳源寺住職関盧山の計らいにより、同寺境内に安置されることになった。こうして同四十二年七月十五日に仮堂を設けて尊像を移したが、正式の堂宇の完成はみず、十一月十六日午後四時に七十八歳で遷化した。これより以前に、鎌倉円覚寺の釈宗演が病を聞き二度も見舞いに来ており、西堂の職を追贈している。

三、飯田道一の志

—— 印度仏蹟巡拝と涅槃銅像の勧募 ——

前節の略伝でみたように、道一は印度の仏蹟を巡拝し、千日間止留して供養を行う志を発した。これは愛知仏教会の賛助緒言に、

不肖道一、曩に名古屋大谷派別院に於て印度大菩提会の総書記ダンマパーラ氏の演説を聞き、大に感ずる所あり。今回単身印度に渡り、自から世尊の靈蹟を巡拝

し、且つ一千日間同地に止留して供養し奉らん大願を
發せしに、釈洪嶽大禪師には左の如く随喜勸募帳の首
に筆を染められ、且つ大徳諸師の賛助有之。今や愈々
出發の準備に着手せんとす。希くは四方奇特の諸氏
は、不肖が微衷を察し且つ不肖が日本仏教徒の諸氏に代
り親しく仏の靈蹟に於て供養し奉るの挙を賛助せられ
ん事を切望するなり。尚不肖が渡天は、啻に仏蹟に供
養し奉るのみならず、併せて仏蹟の現狀を調査し将来
渡天者の便を計らんとするにあれば、茲に一言して随
喜勸募の緒言とす。

右の趣意を賛成候也

愛知仏教会

とあり、明治二十七年に名古屋の大谷派別院で開かれた印
度大菩提会の総書記のダンマパーラ氏の演説を聞いて感激
したからである。そのため各地で演説会を開いたり、名士
を訪ねて浄財を募り助力を仰いだ。明治二十七年四月に鎌
倉円覚寺の釈宗演が記した勸募帳の寄語には、

雪山は高し。然れども仏徳の高きに及ばず。恒河は深
し。然れども法恩の深きに及ばず。而して雪山や恒河

徳源寺の涅槃銅像について（川口）

や今尚其高深を改めず、独り仏法に至ては竺土寥とし
て聞くことなし。顧ふに現今彼土僧宝社会一偉人の出
るなきに因るか、実に慨すべし。昔は西來の三蔵渡天
の大徳陸統輩出して世を益し人を利す。就中晋唐の
間、法顯玄奘義浄等の龍象皆法を求めて長征留竺或は
十年或は二十年各々法宝を齎して回る。吾朝古來亦渡
天の志を抱きし英衲其人に乏からず。然れども皆果さ
ず。蓋し吾國は東海の絶島且つ当時未だ交通機関の備
はらざるに由る。今や然らず。陸に鉄車あり、海に駛
舶あり、以て駕すべく以て搭すべし。復昔時の行路難
なきなり。然るに近年此学理的神通妙用を利用して如
來の聖跡に拝詣したる者僅に北島道龍、南条文雄、釈
興然等の数氏あるのみ。予亦曾て錫蘭に留學し、常に
仏跡巡拝を以て念とし、而して遂に果さず、自ら遺憾
となす。昨法兄飯田道一禪士忽ち來て告ぐるに、入竺
の事を以てし、且つ曰ふ。此行先づ仏陀伽耶に至り、
一千日を期して搭下に奉侍し、一食卯齋六時行道旁ら
一字の僧房を造營して以て、後來巡拝者の便を計らんと
欲すと。而して卒先此挙を賛助する者は、実に愛知

徳源寺の涅槃銅像について（川口）

仏教会の篤志諸氏なりと云ふ。嗚呼禪士は齡既に六旬を越へ身に儋石の貯へなし。而して此大願を發す。所謂老て益々壯なる者か寄語す。江湖同志の士女各々一臂を振て随喜贊襄の勝縁に漏るゝこと勿れ。

明治廿七年春四月

瑞鹿山樵積洪獄識

とある。しかし、残念ながら日清戦争が勃発し、印度行きは断念せざるを得なくなつたが、九月には日清間で平和条約が結ばれ、渡天の途が開かれた。

そこで、道一は九月十三日に京都の靈源院にいた釈守愚とともに京都を出発し、大坂に着いた後、汽船で神戸に渡り、十六日の正午に出帆の土佐丸に乗り込んで出発した。ところが、当時の印度は大凶作にみまわれ、食べ物にも事欠くようであつたところから、百余日で帰朝することとなつた。そのため道一は、今までの方針を改めて工匠に依頼し、印度拘尸那喝拉涅槃堂の尊像をまねて、丈六の涅槃像を鑄造し八事山に安置して十方の檀信徒の道場にしようとした。その銅鑄涅槃像を勧募する勧募帳の緒言をあげてみると、

銅鑄涅槃像勧縁緒言

現時仏教僧侶二三等アリ、所謂道眼炬ノ如クニ燿キ、戒徳珠ノ如ク潔ク進テ四弘誓願輪ニ鞭チ、応機摂物能ク仏種ヲ伝播シ仏恩ヲ報答スル者之ヲ高等トナシ。道徳未タ嵩カラス、学識稍々隘ト雖ドモ、志シ純ラ道ニ存シ、境ニ蒞テ移ラス。常ニ布教伝道ヲ以テ任務トスル者之ヲ次等トナシ。」身ニ学徳ナシト雖ドモ、心ヲ護法ニ傾ケ、或ハ仏像経巻ヲ製作シ、或ハ殿堂伽藍ヲ建立シ自ラ信シ人ヲシテ信セシメ、聊カ名利ノ心ナキ之ヲ常等トナス。」若シ夫レ不学無識破戒濫行ニシテ一点ノ菩提心ナキモノニ至テハ、仏ノ所謂獅子身中ノ虫我之ヲ何トカ言ハン。

飯田道一首座ハ、素ト一箇無依ノ道人、状貌瑰梧志氣剛直齡耳順ヲ過タルモ誓テ住院セス。東西ニ奔走シテ建化維力ム。山階宮晃親王殿下曾テ信心堅固ノ四大字ヲ書シテ首座ニ賜フ、以テ其素行ヲ知ルヘシ。去年九月宿願ヲ荷テ遠ク印度ニ航シ、仏陀ノ四聖地ヲ歴礼シテ還ル。近頃錫ヲ飛バシテ予ガ豆南巡教ノ客舎ニ来リ、告テ曰ク柄始メ渡天ノ時三ヶ年ヲ期シテ仏陀迦耶

ニ止住シ、教主釈迦牟尼如来ヲ供養セント欲シキ。然ルニ何ゾ凶ラン。年恰モ凶歎百穀稔ラス。餓莩塗ニ充チ流氓踵ヲ接ス。慘憺タル其景真ニ名状スヘカラス。然レト悲哉、衲ハ一箇ノ貧道而モ彼ノ国ノ言語ニ通セス。又風俗ヲ諳セス。周急ノ同情ハ燃ルカ如クアリテ而シテ之ヲ施スノ方便ヲ知ラス。遂ニ涙ヲ揮テ彼国ヲ去ルノ已ヲ得ザルニ会フ。然レドモ前志ハ翻ヘス可ラス。今ヨリ更ニ方針ヲ軋ジ全国ヲ跋涉シテ四方ノ仏信者ヲ訪ヒ、各家藏スル所ノ古鏡ヲ乞ヒ求テ之ヲ妙技ノ工匠ニ命ジテ印度拘尸那喝拉ノ摸型ニ法トリ、丈六ノ涅槃像ヲ鑄造セシメテ之ヲ尾張国八琴山ニ安措シ、広ク十方ノ檀信ニ瞻礼セシメ、永ク種福植徳ノ道場トナサント欲ス。且ツ衲自ラ此尊像ニ奉侍シテ半死ノ残喘ヲ送ラバ微願於是カ全矣。嗚呼善哉拳ヤ首座ノ如キハ敢テ先ノ所謂三等ノ僧ヲ以テ律ス可カラス。蓋シ其跡常等ニ似テ其志高等ニ位ス。予カ称シテ一箇無依ノ道人トスルモノ所以ナキニアラス。庶希クハ天下篤志ノ諸氏一臂ノ力ヲ添ヘテ首座ノ勝志ヲ玉成セシメ玉ヘ。仏言觀ニ人施道助レ之歡喜得レ福甚大沙門問曰此福尽

徳源寺の涅槃銅像について (川口)

乎。仏言譬如一炬之火數千百人各以一炬來分取熟食除冥。此炬如レ故福亦如レ是ト書シテ鑄像募緣簿ノ緒言トナス。

明治三十年丁酉四月於豆南田子浦客窓

瑞鹿山主釈洪嶽識

とあり、やはり釈宗演が記している。また、涅槃銅像の設計書を道一と岡谷惣助が次のように記しており、

設計書

一 釈尊涅槃銅像

御丈 壹丈六尺

目方 凡三千貫

一同 台座

巾 四尺五寸

長 貳丈

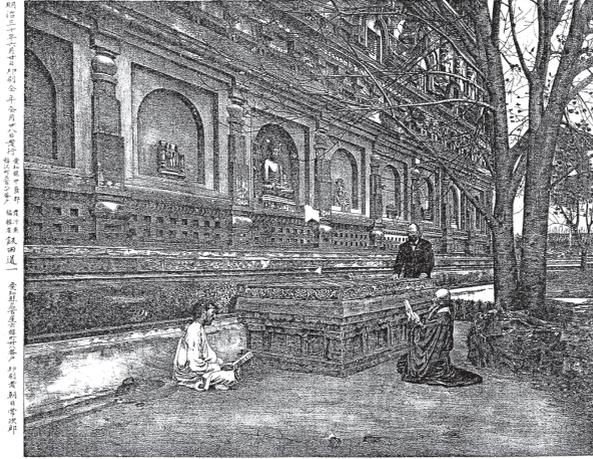
高 貳尺五寸

目方 凡貳千五百貫

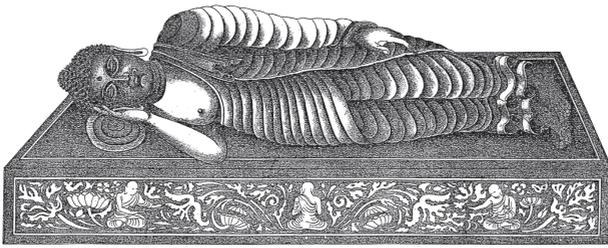
一 御堂煉瓦造

間口 五間

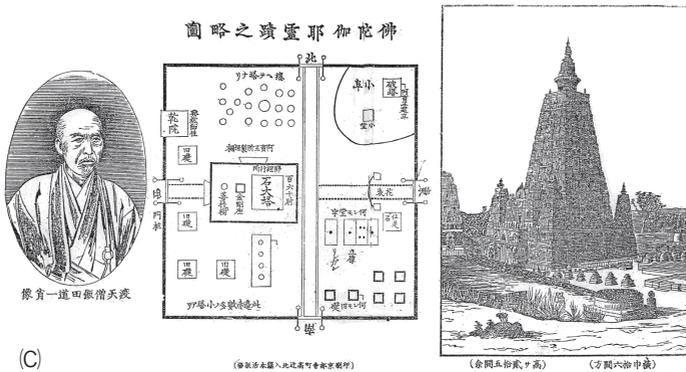
奥行 三間



(A) 品曹非 樹提菩成則全面塔大耶伽陀佛度印



(B) 品曹非 像尊六丈會祭涅槃拉喝那尸拘度印
一分五廿
彫次堂日新權利印尸魯六尺町櫻市羅中布羅余 一蓮田親生親細細製作佛尸魯十八百三町四崎島守結和愛 行我々 宗金 刷印日九月九年十三治緒



(C) 像實一蓮田報僧天渡
(圖製法本圖ハ此院高竹會新堂親印)
(余開五和武ノ高) (方開六治中渡)

右惣費用金壹万円余

仏種ハ縁ヨリ生ジテ安樂菩提ノ華実ヲ結び、徳ハ陰徳ヨリ起リテ、余慶子孫ノ万福トナル。此レ聖者賢哲ノ金言タリ。野僧力ヲ微ト雖モ十方信者ノ贊襄ヲ得テ、右尊像ヲ鑄造シ奉リ。此ヲ尾張国名古屋市ヲ距ツル東方一里八事山ニ安置シ以テ、朝暮礼拝供養シ贊襄諸家ノ為メ、今世ハ円満ノ祈祷トシ、来世ハ安樂ノ修法タラント欲ス。冀クバ十方ノ善男善女一日ニ壹厘ヅ、千日間積立テ、此金額壹円ヲ喜捨法施シ給ヘバ長ク芳名ヲ台座ニ彫刻シ、其善徳ヲ後世ニ伝ヘント期ス。此レ道一ガ懇請スル所ナリ。敬白

明治三十一年

涅槃會願主

飯田道一

鑄造委託受人

岡谷惣助

これによれば、御丈は一丈六尺で、目方は約三千貫もあり、台座の中や長さ、高さ、目方も記されている。なお、御堂は間口五間、奥行三間で、煉瓦造を計画していたよう

徳源寺の涅槃銅像について（川口）

である。総費用は壹万円余がかかり、喜捨者の芳名を台座に彫刻して後世に伝えようとした。

道一は、六月二十八日に「印度仏陀伽耶大塔眷面金剛座菩提樹」(A)を、九月九日に「印度拘尸那喝拉涅槃會丈六尊像―廿五分一―」(B)の図を発行しており、名古屋市桜町三十八番戸の朝日常次郎が印刷している。また、発行年月日は不詳であるが、京都寺町高辻北入の藤本活版場から出された「仏陀伽耶靈蹟之略図」(C)には、仏陀伽耶の大塔と道一の肖像が一緒になっている。

四、「天竺仏蹟巡拝日誌」と「印度旅行日記」

八事山興正寺の八事文庫には飯田道一関係の文書を所蔵している。どうして所蔵することになったかの理由は不詳であるが、道一と当時の十四世住職梅村覚玄との交流があったためかとも思われる。それは、初め道一の発願した涅槃銅像を興正寺境内の遍照院前に寝釈迦堂を建立して、そこに安置される予定であったためからと考えられる。しかし、残念ながら、それは実現されなかった。

八事文庫に所蔵する「天竺仏蹟巡拝日誌」（仮題、八事

徳源寺の涅槃銅像について（川口）

文庫文書三二）は、明治二十九年九月十六日から十月三十一日までの日誌である。それが飯田道一の自筆であるか他人の書写したものかは不詳である。しかし、内容をみると天竺での仏蹟巡拝日誌である。それが道一のものと考えられるのは、原稿用紙の真中の折目に印刷してある「天竺仏蹟霊塔興復 大日本国大願志供養講」の講が、道一の寄附を募った講であるからである。

また、「明治三十拾四年日誌」（八事文庫文書二〇六三）の六月二十三日項には、

飯田道一発起戦死者追弔会、徳源寺和上導師相勤ム。

僧侶四十五人余也。

とあり、興正寺で道一が発起人となり、徳源寺の住職が導師を勤めて、四十五余人の僧侶で日清戦争の戦死者追弔会を行っている。

さらに、明治二十七年四月から三十年四月までに印刷された印度仏蹟調査のための勸募助縁帳の一枚刷の緒言や設計書があり、「印度仏陀伽耶大塔背面金剛座菩提樹」「印度拘尸那喝拉涅槃会丈六尊像 二十五分」「仏陀伽耶靈蹟之略図」などの印刷物も所蔵しているとところから考えられる。

そこで、「天竺仏蹟巡拝日誌」（以下、「日誌」と『梅干和尚』三十三頁以下に所収している。「印度旅行日記」（以下、「日記」）を並列に対照しながら内容をみてみたい。ただし、「日誌」は十月三十一日まで、「日記」は十二月二十六日までが記されている。

〔日誌〕

九月十六日 晴天

正午寒暖計九十度、午後一時二十五分神戸出帆。

金三拾銭

〃五 銭

蓬菜舎ボーイ

ラムネ

〃參拾五銭

〔日記〕

明治二十九年九月十六日、晴天、正午寒暖計九十度、午後一時廿五分神戸港出帆。

〔日誌〕

九月十七日 晴天

朝寒暖計七十度、正午八十一度、午前十時門司ニ着ス。

〔日記〕

十七日、晴天、朝七十度、正午八十一度、午前十時馬
関に着す。

全五錢

×壹円五十四錢五歩

齒磨粉

〔日記〕

十八日、晴天、朝七十度、正午八十度、馬関にて石炭
積込。

〔日誌〕

九月十八日 晴天

朝七十度、正午八十度

〔日誌〕

九月十九日 晴天

朝六十九度、正午七十二度、午後四時門司ヲ発ス。

〔日記〕

十九日、晴天、朝六十九度、正午七十二度、午後四時

馬関出帆。

ソバ粉

寒晒

靴墨

靴バケ

草履

ナメシ皮

土瓶

端艇

煙草

紙

金拾四錢

全拾四錢

全拾錢

全八錢五厘

全二錢

全七錢

全六錢

金四拾錢

全四拾五錢

全三錢

徳源寺の涅槃銅像について(川口)

徳源寺の涅槃銅像について（川口）

〔日誌〕

九月二十一日 晴天

朝七十二度、正午八十度。

〔日記〕

二十一日、晴天、朝七十二度、正午八十度。

〔日誌〕

九月二十二日 曇天

朝七十九度、正午八十二度。

〔日記〕

二十二日曇天、朝七十九度、正午八十二度。

〔日誌〕

九月二十三日 晴天

朝八十度、正午九十度、午後十一時、香港ニ着ス。

〔日記〕

二十三日、晴天、朝八十度、正午九十度、午後十一時

香港に着す。

〔日誌〕

九月二十四日 晴天、但シ驟雨アリ

朝八十度、正午八十三度、午後四時香港ヲ発ス。

〔日記〕

二十四日、晴天、但し驟雨にて、朝八十度、正午八十度、午後四時に出帆す。

〔日誌〕

九月二十五日 晴天

朝七十九度、正午八十六度。

〔日記〕

二十五日、晴天、朝七十九度、正午八十六度。

〔日誌〕

九月二十六日 晴天

朝八十度、正午九十一度。

〔日記〕

二十六日、晴天、朝八十度、正午九十一度。

〔日誌〕

九月二十七日 晴天

朝八十二度、正午九十度。

〔日記〕

二十七日、晴天、朝八十二度、正午九十度。

〔日誌〕

九月二十八日 晴天

朝八十度、正午八十八度。

〔日記〕

二十八日、晴天、朝八十度、正午八十八度。

〔日誌〕

九月二十九日 晴天

朝七十八度、正午九十四度。

〔日記〕

二十九日、晴天、朝七十八度、正午九十四度。

〔日誌〕

九月三十日 晴天

朝七十九度、正午八十五度、午前五時新嘉坡着、午後四時ブリテツシユ インデヤ航海会社ノ汽船ジャワ号ニ乗ジテ、新嘉坡ヲ発ス。

金三十拾銭

全三十拾銭

全五銭

全七銭

全壹円五十銭

全七十銭

全八十二円

全八十五銭

全三十五銭

全四銭

全壹円

× 八拾七円拾六銭

ボーイ

ボーイ

煙草

バナ、

馬車代

支度代

汽船代

貨物運賃

煙草

紙

ビール

徳源寺の涅槃銅像について（川口）

〔日記〕

三十日、晴天、朝七十九度、正午八十五度、午前五時
新嘉坡に着す、午後四時ブリテツシユインデヤ航海会
社の汽船ジャワ号に乗かへて、新嘉坡を出帆す。

〔日誌〕

十月一日 晴天

朝七十度、正午七十八度。

〔日記〕

十月一日、晴天、朝七十度、正午七十八度。

〔日誌〕

十月二日 晴天

朝七十七度、正午七十八度、午前六時ピナンニ着ス、午
後四時同地ヲ発ス。

金四十銭

金二十銭

メ六拾銭

ハシケ

全

〔日記〕

二日、晴天、朝七十七度、正午七十八度、午前六時ピ
ナン港に着す、上陸午後四時同地を出帆。

〔日誌〕

十月三日 晴天

朝七十六度、正午七十七度。

〔日記〕

三日、晴天、朝七十六度、正午七十七度。

〔日誌〕

十月四日 晴天

朝七十四度、正午七十五度。

〔日記〕

四日、晴天、朝七十四度、正午七十五度。

〔日誌〕

十月五日 晴天

朝七十二度、正午七十六度。

〔日記〕

五日、晴天、朝七十二度、正午七十六度。

全二十ルピー

×貳拾八ルピー三アナ

×貳円

室代

〔日誌〕

十月六日 晴天

朝七十三度、正午七十五度、午前五時ラングン着。

〔日記〕

六日、晴天、朝七十三度、正午七十五度、午前五時蘭

軍港に着す、上陸す。

金壹円

全一ルピー

全八アナ

全四アナ

全二アナ

全四アナ

金二ルピー八アナ

全壹円

全一アナ

全二ルピー

全八アナ

全一ルピー

ボーイ

馬車

ハシケ

ハシケ

博物館

ハシケ

ウイスキー

馬車

タバコ

ハシケ

クリ

馬車

〔日誌〕

十月七日 晴天

朝七十二度、正午七十三度、午前六時ラングンヲ発ス。

〔日記〕

七日、晴天、朝七十二度、正午七十三度、午前六時蘭

軍港を出帆。

〔日誌〕

十月八日、晴天

朝七十二度、正午七十三度。

徳源寺の涅槃銅像について（川口）

徳源寺の涅槃銅像について（川口）

〔日記〕

八日、晴天、朝七十二度、正午七十三度。

〔日誌〕

十月九日 晴天

朝七十一度、正午七十四度。

〔日記〕

九日、晴天、七十一度、正午七十五度。

〔日誌〕

十月十日 晴天

朝七十四度、正午七十五度、午後五時カルカツタ着。

- 金壹ルピー
- 全一ルピー
- 全一ルピー
- 全二ルピー
- 全八アナ
- 全八アナ
- 案内者
- ボーイ
- ボーイ
- クリ
- 馬車
- クリ

全三アナ

全二アナ

全二パイイス

全四アナ

全四アナ

×六ルピー十三アナニパイイス

〔日記〕

十日、晴天、朝七十四度、正午七十五度、午後五時印度

カルカツタ港着す、直ちに上陸馬車にてホテル付。

〔日誌〕

十月十一日 晴天

朝七十二度、正午七十三度。

- 金一ルピー
- 全一アナ
- 全一ルピー
- 全四アナ
- 全一アナ
- 馬車
- ボーイ
- 馬車
- 靴直シ代
- 証券印紙
- クリ
- タバコ
- 杖
- ボーイ
- ボーイ

全一ルピー八アナ

全四アナ

×四ルピー二アナ

馬車

ボクセス

〔日記〕

十一日、晴天、朝七十二度、正午七十三度、ホテルに上宿、正午より菩提会に行、西倫僧面会す、夫より印紙端書等求めて、夫より日本人の寄留地行きて、岩本千代宅に至りて、三十分間咄してホテルに帰る。

〔日誌〕

十月十二日 晴天

朝七十一度、正午七十三度。

金九ルピー八アナ三パイイス

全一ルピー八アナ

全四アナ二パイイス

全四アナ

全八アナ

全八アナ

印紙端書等

馬車

水ラムネ

新聞

ボーイ十一日分

ボーイ本日分

全壹円

〔日記〕

十二日、晴天、朝七十一度、正午七十三度、此日手紙認居るなり、午後六時より公園地へ見物行、八時三十分帰る。

〔日誌〕

十月十三日 晴天

朝七十度、正午七十五度、午後七時カルカッタヲ発ス。

金四ルピー十五アナ二パイイス

全一ルピー

全三ルピー

全四アナ

全五アナ

全五アナ

全八アナ

全二十七ルピー八アナ

全二ルピー八アナ

×十二ルピー九アナパイイス

×壹円

バブニ与ふ

端書印紙

旅行案内

コンロ

カゴ

茶碗

ミカン

タバコ

ホテル

ウイスキー

徳源寺の涅槃銅像について(川口)

徳源寺の涅槃銅像について（川口）

全四アナ	籠
全五アナニパイイス	砂糖
全八アナ	油
全ニパイイス	瓶
全ニアナニパイイス	ラムネ
全八アナ	ボーイ
全四アナ	ボーイ
全六アナ	クリ
全ニアナ	ボーイ
全ニルピー	馬車
全三アナ	クリ
全ニアナ	クリ
全一ルピー	馬車
全一ルピー	馬車
全四アナ	クリ
全ニハルピー十三アナニパイイス	汽車
全ニアナ	クリ

×七十六ルピー六アナ十二パイイス

〔日誌〕

十三日、晴天、朝七十二度、正午七十四度、午後六時、予は釈守愚師と共にカルカツタのホテルを発し、馬車に乗してハウラ停車場に赴き、仏蹟参拝の途に上り、同時停車場に着し、七時二十七分ハウラ発の臨時急行列車に乗じてバンキポールに向ふ、此急行列車は、目下印度教の大祭日たるダルガプー ज्याの祭典に就き、臨時発車せるものなり、印度の急行列車は一時間四十余哩を疾走するものなれば、其迅速なることは云ふ迄も無く、車体の動揺も亦頗る甚だしくして目の廻る様に覚へたり、予等は同車せしベンガールの代言人某氏と共に種々の談話を為し、午後十一時頃睡に就けり。

〔日誌〕

十月十四日 晴天

朝七十度、正午八十度、午前六時バンキポール着、直チニ汽車ニ乗換へ、伽耶ニ至リ、仏陀伽耶ニ詣シ、伽耶ニ帰ル。

金二アナ
 全二アナ
 全七ルピー八アナ
 全二アナ
 全一パイイス
 金四アナ
 全二アナ
 全三アナ
 全一ルピー
 全二アナ
 全一ルピー十二アナ
 全四ルピー
 全八ルピー十四アナ
 全四アナ
 全四アナ
 全二アナ
 全一アナ
 全四アナ

クリ
 タバコ
 汽車
 クリ
 乞食
 ペンシル
 クリ
 クリ
 馬車
 クリ
 仏陀伽耶ボクセス
 馬車
 バンガロー
 ボーイ
 ボーイ
 クリ
 クリ

全三アナ
 全一ルピー
 全四アナ
 全三アナ
 全三アナ
 全三アナ
 クリ
 馬車
 クリ
 クリ

「日記」

十四日、晴天、朝七十一度、正午汽車室内九十七度、午前五時バンキポールに着し、汽車を下りて停車場の休息室に赴き、朝飯を喫し、同八時二十五分ガヤ鉄道の汽車に乗じてガヤに向ふ、ブーンプーンマサルヒ等八ヶ所の停車場を歴て、午前十一時ガヤに着し、直ちに馬車に乗じてダツクバンガローに赴き昼飯を喫す、此処に於て予等は三名の日本人に逢遇せり、彼等はカルカツタに在留するものにして、久しく仏蹟参拝の念を懐き居りしが、今回予等が仏蹟に赴くを聞き、急卒行李を整へ発足したるものにして、実はカルカツタより予等と同行する筈なりしも、汽車の都合に抛り、予等より先きにガヤに着したるものなり、午後二時、予等は馬車を駆りて仏陀伽耶に向ふ、六哩の行程

大道低の如く、椰子芭蕉椀椰子菴摩羅果樹等道路の両側に鬱蒼として天然の涼蓋を造れり、漸く近くに及びて、檀特山前正覚山等峨々として左方に屹ち、尼連禪河は其下を流れ、仏陀伽耶大塔は巍然として半空に聳へ、予が精神恍惚として、殆んど身の人間界にあることを忘れたり、三時三十分仏陀伽耶に着す、外道マハントの邸宅は大塔の前面にあり、困らずに方六七町の広高なる土塀を以てし、中に四五の高樓大閣を構へ、儼として城郭の如し、予等馬車を下り、徐ろに大塔の境内乾院に赴き止住、僧スマンガラ及び其の他の諸氏に面話し、香華灯燭の用意を整へ、塔内の仏像及び金剛座を拝し了て婆羅門マハントの請に応じて、彼れが家に赴けり、マハントの邸宅は前にも述べし如く、広大なるものなるが、門に入るに及びて、更に其結構の偉大なるに驚けり、彼は数十の下僕を使役し、十余頭の象及び駱駝を飼ひ、数百頭の牛羊を飼養せり、予等が茲に至るの前日、即ち十月十三日はドルガブージャ祭典の当日なるを以て、マハントは百頭羊を殺してシバ神に供したり、対談中彼は頻りに仏教徒と婆羅門教

徒と隙を生じたるを嘆き、仏陀伽耶の裁判事件に就き、日本仏教徒に哀訴するところありたり、予は此事に付き、我同胞に委しく報道すべきも、今は茲に之を略す、マハントと対談すること三時間余、此間彼は種々の美味なる菓子果物牛乳等を饗し、是非今夕は予が宅に一宿せよとて、最と懇切に言ひけるも、予等は三名の日本人が伽耶に於て予等を待居る為め固辞して帰り、直ちに馬車を駆りて、午後八時ガヤのバンガローに着したり。

〔日誌〕

十月十五日 晴天

朝七十度、正午九十一度、午前二時伽耶ヲ発シ、バンキポールヨリ更ニベナレスニ向ヒ、十一時三十五分同所着。

金三アナ

クリ

全十七ルピー十二アナ二パイ

汽車

全二アナ

クリ

全三アナ

クリ

全三アナ

クリ

全一ルピー

馬車

全一ルピー十五アナ

拝見料所々

全三ルピー

馬車

全二ルピー

案内者

メ二十六ルピー六アナ二バイス

〔日記〕

十五日、晴天、朝七十度、正午九十一度、午前二時、

予等は伽耶のバンガローを発し、二時四十分ガヤ発の
汽車に乗じてバンキポールに向ふ、五時五十四分バン
キポールに着し、直ちに東印度鉄道会社の急行列車に
乗じてベナレスに向ふ、十一時三十分ベナレスカント
ンメント停車場に着し、馬車に乗じてクラークホテル
に赴き、昼飯を喫し了て更に馬車に乗じてベナレス市
内の寺院を巡拝す、当市は古代印度国中の首府なりし
を以て、最も莊麗偉大の都府たり、就中寺院の数頗る
多くして、婆羅門教に属するもの一千五百ヶ寺、回教
に属するもの二百余ヶ寺あり、予等は初め猿猴寺に赴

徳源寺の涅槃銅像について(川口)

き、次に托牛寺黄金寺等に詣し、恒河河畔に行きて舟
を備ひ、河岸の各寺院を巡拝して午後七時ホテルに帰
れり。

〔日誌〕

十月十六日 晴天

朝七十三度、正午八十八度、午前鹿野苑ニ詣シ、午後バ
ンキポールニ帰り宿ス。

金二ルピー八アナ

馬車

全八アナ

ボクセス

全八アナ

ッ

全二ルピー八アナ

写真

全一ルピー

ボーイ

全十六ルピー

ホテル

全二ルピー八アナ

舟代

全一ルピー

馬車

全四アナ

ボーイ

全四アナ

ボーイ

全四アナ

ボーイ

徳源寺の涅槃銅像について（川口）

- 全三アナ クリ
- 全三アナ クリ
- 全四アナ ボーイ
- 全四アナ ボーイ
- 全三アナ ラムネ
- 全二アナ クリ
- 全三アナ パン
- 全三アナ クリ
- 全二ルピー 案内者

「日記」

十六日 晴天、朝七十三度、正午八十八度、午前六時、予等は馬車を備ふて鹿野苑に赴けり、是即ち釈尊仏陀伽耶成道、最初此地に來りて法輪を転ぜし所なり、七時鹿野苑に着し、大塔に向て誦経礼拝したり、途中不図真宗本派の留學生川上貞信氏、天台宗の學生大宮孝潤の二師に逢遇したり、師等も今回仏蹟を参拝せん為め、孟買より当地に來りたるものなり、此に於て予等は、同行者七名と成りたり、蓋し日本仏教徒が

七名も打連立ちて仏蹟に参詣したるは、近頃珍らしき話なり、同十一時ホテルに帰り昼飯を喫し、暫時休憩の後、午後二時九分ベナレス発の急行列車に乘じ、七時六分バンキポールに着し、直ちに同地のダツクバンガローに投ぜり、此地より三名の同行日本人はカルカッタに帰れり。

「日誌」

十月十七日 晴天

朝六十七度、正午百五度、午前六時バンキポールヲ發シ、タシルデヲリヤニ着シ宿ス。

- 金五アナ パナ、
- 全一アナ 徳利
- 全一ルピー 朝茶
- 全四アナ ボクセス
- 全二アナ クリ
- 全六ルピー十アナ バンガロー
- 金八アナ 馬車

全拾七ルピー十五アナ

全一ルピー

全二ルピー八アナ

全一ルピー四アナ

全一ルピー

全二アナ

全四アナ

全三アナ

全一アナ

全四アナ

全二ルピー

全一ルピー

全一ルピー

全一ルピー

メ三十七ルピー八アナ

汽車

茶

ビスケット

ウイスキー

茶

ボーイ

ボーイ

クリ

乞食

ボーイ

買物

買物

牛乳

ボクセス

〔日記〕

十七日、晴天、朝六十七度、正午汽車中百五度、午前

六時、予等同行四名はバンガローを発し停車場に至

り、七時十七分バンキポール発の汽車にて仏涅槃地な

徳源寺の涅槃銅像について(川口)

るクシナガラに向ふ、八時十分デガガート停車場に着

し、夫より汽船に乗じて恒河を渡り、同九時三十分対

岸なるベラザガート停車場に着し、直ちに北西鉄道会

社の汽車に乗じてタシルテヨリヤに向ふ、午後六時四

十分同地に着し、インスベクシヨンハウスに投ず。

〔日誌〕

十月十八日 晴天

朝七十度、正午百七度、午前四時タシルテヨリヤヲ発

シ、クシナガラニ到テ宿ス。

金壹ルピー八アナ

金一ルピー

全二ルピー

全一ルピー

全一ルピー

全八アナ

全一ルピー

全一ルピー

牛車

買物

バザー買物

ボクセス

ボクセス

ボーイ

米

卵

徳源寺の涅槃銅像について(川口)

全八アナ

牛乳菓子

全三アナ

ボクセス

全一ルピー八アナ

米及買物

×十一ルピー三アナ

〔日記〕

十八日、晴天、朝七十度、正午牛車上百七度、午前四時予等はインスベクシオンハウスを發しクシナガラに向ふ、タシルデヨリヤよりクシナガラ迄は、行程僅に二十哩なるも、僻遠の地なるを以て、道路險悪砂漠の如し、加ふるに馬車の便無きを以て、予等は牛車を備ひて荷物を運ばしめ、自から日本より携へ来りたる草鞋を穿ちて徒歩せり、午後七時クシナガラに着し、大塔前の一民家なる檐下に席を鋪き、以て一夜を明かせり。

〔日誌〕

十月十九日 晴天

朝七十二度、正午九十度、終日涅槃地ニ留り、午後六時ヨリタシルデヨリヤニ帰ル。

金四ルピー

バンガロー室代

全二アナ

ボーイ

全一アナ

アンマ

全二アナ

替銭

全二アナ

ボーイ

×四ルピー七アナ

〔日記〕

十九日、晴天、朝七十二度、正午檐下九十度、早天より沐浴して涅槃堂に入り、焼香供養し終日誦經して、午後六時頃より同地を發し、終夜徒歩してタシルデヨリヤに帰れり。

〔日誌〕

十月二十日 晴天

朝六十九度、正午七十六度、終日タシルデヨリヤニ留り、午後九時ノ汽車ニテバンキポールニ帰ル。

金二ルピー

米其他買物

全八アナ
 全三アナ
 全三アナ
 全一アナ

アンマ及乞食
 クリ
 クリ
 乞食

〔日記〕

二十日、晴天、朝六十度、正午室内七十度、午前六時予等はタシルデヨリヤインスベクシヨン、ハウスに着し、前夜の疲労を休めん為め、終日同所に留り、午後九時十分発の汽車にてバンキポールに向へり。

×ニルピー十五アナ

十月二十一日 晴天

朝六十六度、正午九十一度、午前七時バンキポールに着シ、直ニ伽耶ニ向ヒ、午後五時仏陀伽耶ニ着ス。

金三アナ
 全三アナ
 全一ルピー

クリ
 クリ
 茶

徳源寺の涅槃銅像について(川口)

〔日記〕

全二アナ
 全三アナ
 全七ルピー八アナ
 全三アナ
 全三アナ
 全三アナ
 全八アナ
 全二アナ
 全二アナ
 全四ルピー八アナ
 全四アナ
 全四アナ
 全三アナ
 全二ルピー八アナ
 全五アナ

クリ
 ボクセス
 汽車
 バナ、
 タバコ
 クリ
 馬車
 クリ
 クリ
 クリ
 バンガロー
 ボクセス
 ボクセス
 油
 買物
 クリ

×十八ルピー八アナ

二十一日、晴天、朝六十六度、正午汽車中九十一度、午前五時ペレザガート停車場に着し、汽船に乗じて恒

徳源寺の涅槃銅像について(川口)

河を渡り、再びデガガートより汽車に乗じてバンキ
ポールに着し、直ちに伽耶鉄道の汽車に乗じて再び伽
耶に向ふ、同十一時三十分伽耶に着し、バンガニーに
於て昼飯を喫し、午後四時馬車を駆りて仏陀伽耶に向
ふ、五時三十分同地に着し、終夜塔前に於て供養せ
り。

の頗る多かりき、仏陀伽耶の仏教徒中に知られてよ
り、各仏教国より此に詣りしもの数千人、然れども今
回の如き大供養を行ひたるは、未曾有のことなりと同
地止住僧は語り居れり。

〔日誌〕

十月二十二日 晴天

朝六十六度、正午七十一度、終日仏陀伽耶ニ留ル。

〔日誌〕
十月二十三日 晴天

朝六十七度、正午九十度、午前八時仏陀伽耶ヲ発シバン
キポールニ到り、午後七時ノ汽車ニ乗ジテカルカツタニ
帰ル。

〔日記〕

二十二日、晴天、六十六度、正午室内七十一度、午前
四時より予等一同沐浴し、大塔下に於て供養せり、午
後六時、予は特別に二十余箱の蠟燭を買求め、大塔の
周囲に点し以て万灯供養を為せり、此は予我が国十方
の有志諸氏に代りて供養の微志を表したるなり、数千
挺のは蠟燭煌々として輝き、予等弥経の声は瓏々とし
て終夜四隣に徹しければ、近傍の老若男女は何事や出
来しけんと思ひしものか、大塔の周囲に群り来りしも

金九ルピー
全五ルピー
全一ルピー
全八アナ
全八アナ
全八アナ
全八アナ
全三アナ
蠟燭
スマンガラ僧
ボーイ
花持
カギ預り
雪隠掃除人
監塔吏ノボーイ
クリ

全二アナ	ターリー
全二アナ	牛乳
全一アナ	牛乳
全二アナ	ターリー
全二アナニバイス	両替
全一ルピー四アナ	ボーイ
全一ルピー八アナ	馬車
全二アナ	ボクセス
全二アナ	煙草
全四アナ	新聞
全八アナ	ボクセス
全三ルピー	昼飯
全二アナ	ボクセス
全四アナ	ラムネ
全八アナ	荷物預代
全三アナ	ジャボン
全二ルピー四アナ	晩飯
全四アナ	ボクセス
全二アナ	クリ

徳源寺の涅槃銅像について（川口）

全二アナ
クリ

×式十八ルピー五アナニバイス

〔日記〕

二十三日、晴天、朝六十七度、正午汽車中九十度、予は暫時仏阿仏陀伽耶に止住し、日夕供養するの覚悟なりしも、同行者の都合により已むことを得ず、一先づ同地を出立することに決し、午前八時無限の名残を後に残して、涙と共に仏陀伽耶を辞し、伽辭に着し、同十時五十四分発の汽車に乗じてバンキポールに向ふ、午後二時四十分同地に着し、休憩の後七時六分発の急行列車に乗してカルカツタに向へり。

〔日誌〕

十月二十四日 晴天

朝七十五度、正午七十七度、午前五時三十分カルカツタニ帰着シ大菩提会ニ投シ、同月三十一日午前五時迄同所ニ留錫セリ。

金一ルピー
馬車

徳源寺の涅槃銅像について(川口)

全三アナ	クリ	全四アナ	ラムネ
全三アナ	クリ	全二アナ	タバコ
全四アナ	散髪	全三アナ	動物園
全二アナ	剃髪	全三ルピー	馬車
全八アナ	煙草	全一ルピー四アナ	洗濯
全二アナ	紙	全二アナ二パイイス	両替
全六ルピー	写真	全二ルピー	靴
全二ルピー八アナ	馬車	全七ルピー八アナ	カバン
全一ルピー十二アナ	蠟燭	全六アナ	茶碗
全一ルピー八アナ	馬車	全二ルピー	真鍮壺
全二ルピー十四アナ	洗濯	全二ルピー十三アナ	木綿
全三ルピー	饗応料	全四ルピー	キヤリコー
全三アナ三パイイス	ラムネ	全六アナ	下駄
全二ルピー八アナ	馬車	全二ルピー八アナ	馬車
全六ルピー十五アナ二パイイス	端書印紙	全二アナ二パイイス	両替
全一ルピー	馬車	全八アナ	ボクセス
全二ルピー八アナ	ウイスキイ	全四アナ	クリ
全六ルピー	写真	全百五十ルピー	船賃
全二ルピー八アナ	馬車	全四ルピー七アナ二パイイス	団扇

全ニルピー四アナ
 全一ルピー四アナ
 全八アナ
 全八アナ
 全二アナ
 全ニルピー八アナ
 全一ルピー八アナ
 全四アナ
 全四アナ
 全二ルピー
 全一ルピー
 全十二アナ
 全十二アナ
 全十五アナ
 全四アナ
 全二アナ
 全四アナ
 全一ルピー四アナ
 全ニルピー八アナ
 全一アナニバイス

馬車
 小包郵便
 ボーイ
 ボーイ
 クリ
 馬車
 馬車
 馬車
 クリ
 馬車
 馬車
 壺

全ニルピー
 全一ルピー八アナ
 全二十ルピー
 全八アナ
 全八アナ
 全ニルピー
 全十二アナ
 全八アナ
 全八アナ
 全八アナ
 全八アナ
 全一ルピー十五アナニバイス
 全四アナ
 全八アナ
 全ニルピー四アナ
 全ニルピー四アナ
 全二アナ十二バイス
 全一ルピー八アナ
 全一ルピー
 全八アナ
 全十二アナ
 全八アナ

クリ
 馬車
 大菩提会
 ハシケ
 大菩提会
 ボーイ
 ボーイ
 ボーイ
 ボーイ
 ボクセス
 ラムネ
 ボクセス
 ボクセス
 ボクセス
 馬車
 ボクセス
 馬車
 ボーイ
 ボーイ
 蝋燭
 洗濯

徳源寺の涅槃銅像について(川口)

徳源寺の涅槃銅像について(川口)

全一ルピー八アナ

馬車

全一ルピー八アナ

馬車

全一ルピー

ボクセス

全十二アナ

ボクセス

全一ルピー

馬車

全八アナ

クリ

全四アナ

クリ

全八アナ

ボクセス

メ式百八十九ルピー一アナ三バイス

此内五ルピー川上氏ヨリ請求

〔日記〕

二十四日、晴天、朝七十五度、正午七十七度、午前五時三十分カルカッタに着し、直ちにクリー、クローなる大菩提会投せり。

二十五日、晴天、朝七十四度、正午八十度、此日より三十一日午前五時迄大菩提会に留錫せり、大菩提会に安置せし有る仏陀伽耶八万四千の霊塔の中なる小塔一
体拝請せり、逗留中に同所在留の日本岩本千代女始め、外三名より数度饗応預れり、博物館、動物館、植

物園等を見物せり。

〔日誌〕

十月三十一日 晴天

午前五時カルカッタヲ発シ海上三昼夜ヲ歴テ、十一月三日午前八時ラングンニ着シ、ダワイヒヤン寺ニ投シ、同月十一日午後四時迄同寺ニ逗留セリ。

金八アナ

ボーイ

全一ルピー

馬車

全一ルピー

馬車

全二ルピー八アナ

馬車

〔日記〕

三十一日、晴天、朝七十三度、正午船中七十八度、午前五時より大菩提会発し、馬車に乗して汽船に乗込、六時にカルカッタ港発して三昼夜を歴て、十一月三日朝七十二度、正午七十五度、午前八時にビルマ国蘭軍港に着、直に上陸同所シダワイヒヤン寺投宿せり、此の国は仏教国にして、同所数百余ヶ寺寺院有り、ヒヤ

ン寺の住職は英語も通じて名僧なり、此の和尚より釈尊臥如来石像二体拝請并にハイタラ葉の古き経七枚、

同大団扇一本貰ひたり、此の寺に八日間船待せり、逗留中に日本人吉田ユキ宅行、此者の依頼にて日本人の墓地於て大施餓鬼を修行せり、其報謝として六日間弁当贈くらる、此の蘭軍市に高大なる仏塔三ヶ所有り、大裏石にて数万体の仏像安置有り、実に信心国なり。

十一日、晴天、朝七十度、正午七十三度、午後四時ヒヤン寺発し、馬車乗して汽船乗込、

十二日、午前六時に蘭軍港出帆、満四昼夜を歴てピイン港に着し、直に上陸、日本人寄留地行て日本僧安藤何某和尚に面会して、此人の案内にて日本人墓地行誦経せり、午後五時再びピイン港出帆、三昼夜を歴て、

十八日、晴天、午後四時新嘉坡港に着す、直に上陸、コラバ町三十七号松尾宮吉方に投宿せり、日本人旅館なり、此所にて日本郵船会社の船待こと二十日間なり、逗中日本僧釈種椶仙和尚色々御見舞預るなり、当和尚の案内にて公園地見物、並に日本人墓地誦経せり。

徳源寺の涅槃銅像について（川口）

十二月七日、雨天、午後四時旅館松尾宅発す。和泉丸に搭す、翌八日午前五時、新嘉坡港出帆、満八昼夜を歴て、

十五日、晴天、午後一時香港に着す。

十六日、晴天、上陸東洋館投宿せり。

十七日、晴天、

十八日、晴天、

十九日、晴天、午前五時香港出帆す。満八昼夜を歴て、

二十六日、晴天、午前十一時着、神戸港に無事帰着す。直に上陸、蓬萊舎に投宿せり、今回印度地方は大早魃にして大飢饉なり、不肖仏蹟止住難出来、無抛帰朝致せり、かの国を縮めて以て帰り、我国名古屋市中に仏蹟

入竺比丘梅干和尚

飯田道一白

右のように「日誌」と「日記」を対照してみた結果、「日誌」には仏蹟巡拝中に使用したものや金額が詳しく記されているが、「日記」にはほとんど記されていない。しかし、現地での行動は「日誌」より「日記」の方が詳しく

徳源寺の涅槃銅像について（川口）

記されており、両書をみることによって、一層詳しい道一の行動が明らかになるであろう。

五、涅槃銅像と堂宇の建立

涅槃銅像は明治三十六年末までに完成の約束であった。それについて「新愛知」（明治三十六年六月十七日 第四四三三号）には、

● 釈迦像の鑄造

中島郡稲沢村なる梅干和尚事飯田道一師は、先般来愛知郡八事山興正寺境内遍照院前に一の寝釈迦堂を建立せんとて、其本尊とすべき釈迦像を鑄造する筈にて、これに要する材料を蒐集せしに、此程に至り古鏡、古銅類数万貫を得たるを以て、数日前当市鉄砲町の岡谷惣助方へ本年末迄に竣成の約束にて鑄造方を依頼せりと。尚ほ竣工を俟ちて花々敷同院へ曳込み据付け後、堂宇の建立に着手せん計画にて、已に敷地（巾五十間、竪三十間）の地均に着手し居れりと云ふ。

とあり、岡谷惣助との約束であった。また、安置場所は八事山興正寺境内の遍照院前に寝釈迦堂を建立し、その本尊

とするはずであった。しかも敷地（巾五十間、竪三十間）の地ならしも行っていた。

ところが、道一は明治四十二年十一月十六日午後三時に病気のため眠るが如く亡くなった。「名古屋新聞」第四九九九号（明治四十二年十一月十六日）の訃報記事によれば、十九日午後一時より徳源寺で葬儀が行われており、「正法輪」第二六九号（明治四十二年十二月十二日）の「彙報」には遷化の広告があり、

● 梅干和尚遷化

梅干和尚として其名も高き老雲水飯田道一師は、去月十六日中風症の爲め、午後三時眠るが如く永眠せられたり。和尚は釈宗演老師の法兄にて、性恬淡嘗て名聞を求めず。「柄は若い時から学問が拙で、寺などは持たぬ」とて一寺の住職たるを肯んせず、「無学でも心掛一つで世の爲め人の爲めに尽せぬ筈はない」と云ふ主義を執り、其篤行仲々に尠からざるが、中にも日清、日露両役の際は、各地に奔走して梅干を募集し、山なす梅干樽を幾回となく戦地に送りたる事は皆人の知る所にして、梅干和尚の名も之れが爲めに得たるな

り。而して師は、嘗て入竺もし、又は生前丈六の涅槃像を名古屋徳源寺境界に建立されしが、故に去る十九日徳源寺には遺骸を迎へて、右涅槃像の下にいと盛大なる津送式を執行されたりと。

これによれば、病名は中風症で、道一は釈宗演の法兄にあたり、名聞を求めず、その篤行は多かつた。十九日には徳源寺に遺骸を迎え、涅槃銅像の下で津葬式を行った。さらに、「禅宗」第一七七号（明治四十二年十二月十五日）には、

●梅干和尚の遷化

去ぬる日清戦役の砌、恤兵の代にとてやぶれ法衣にやぶれ草鞋老軀をも厭はず、自ら荷車に大鉦を乗せたるを曳き歩て、東西南北より梅干の喜捨を乞ひ、其勞苦の結果、蒐集なし得たる数万石の梅干を戦地に送りたる。世にも奇特の事曾て、畏多くも久邇宮殿下の御聴きに達し、先つ年宮殿下御来名の折とか和尚をわざとく御旅館へ召し寄せられ「和尚は太う梅干が好きとナ」との親しき御言葉を賜はり、且つ沢山の梅干の御馳走をなし給はりて、一身の光榮を荷ひ梅干和尚の名

徳源寺の涅槃銅像について（川口）

を児童走卒にまで知られたる名古屋市中区袋町医王寺寄寓飯田道一師は、本年春頃より中風症に罹り専ら療養中なりし処此程の寒気に病勢俄に革まり、去月十六日午後七十三歳を一期として溘焉遷化せり。和尚は故越溪禅師の法嗣にして、今を去る二十年以前身を雲水に任して飄然として名古屋市に來りしを、東区宝町河村武七氏等が和尚の風貌凡俗を超絶せるに帰依し種々世話をなし、今日に至りたるものにて和尚には世に伝ふべき奇行尠からざる中にも最も著しきは、日清戦役後軍馬の戦死を憐みて其供養塔を東区新出来町臨濟宗道場徳源寺に建立せし外、単身印度を漫遊して白玉の仏像其他数多の珍品を將來し、帰朝後は拘尸那城の釈尊涅槃像が最も氣に入りたりとて同じ涅槃像を鑄造せんものと発願し、一万数千円の淨財を集めて此程漸く中区鉄砲町一丁目金物商岡谷惣助氏の手に成りたるを徳源寺の松林中に安置し、尚一大殿堂を建立せんとして苦心中、遂に其志を果さず遷化したるなり。病中は生前の約束にて駿河町の中川痔療病院長が施療し、長者町万常未亡人伊藤ミタ子が篤志看護婦となりたるに

徳源寺の涅槃銅像について（川口）

付、葬儀は和尚の遺言に依り印度より将来せし白玉仏像を取めたる箱を棺桶として用ゐる。去月十八日午後一時前記丈六涅槃像の尊前に於て徳源寺師家碧松軒廬山老師導師となり、一山の大家を率ゐて一切御布施無しの葬儀を営めりと云ふ。因に梅干和尚自作の涅槃像殿堂建立の募縁文左の如し。

此數くちやの梅干和尚事、七十古稀を過ぎしよい齡をして、俄かに鳶を鳴かすやうな花嫁が欲しくなり候まゝ、先年鉄草鞋を穿きながら、遠き印度三界まで尋ね廻り、漸く拘戸那と申す処にて探し当て候は、色の黒き丈六涅槃像にて候。扱婦朝以來、花につれ月につれ此御姿恋しくて恋しくて堪へられず候まゝ、セメて写真の代りにと。当市の岡谷惣助氏に相頼みて、発願鑄造致し候か、即ち徳源寺の松林、草を枕にコロリ寝転びておはす釈尊涅槃像がかれにて候、和尚事つらく、惟みるに、我々衆生には朝夕雨露を凌ぐ家有之候に、釈尊涅槃像に一字の殿堂さへ無之は、和尚死しての後も心残りに候、あはれ願くは江湖有縁の人達、和尚の香奠代りと思召して、

一日も早く此殿堂建立あらん事を。

梅干和尚頓首敬白

との記事があり、晩年は名古屋市中区袋町の医王寺に寄寓していたようで、徳源寺師家の関廬山の導師によつて葬儀が行われている。なお、自作の涅槃像殿建立の募縁文もあげられている。

明治四十四年五月十二日発行の「正法輪」第二八六号には、

●徳源寺の金銅涅槃像

名古屋徳源寺の金銅涅槃像は、今は物故したれども、曾て梅干和尚とて名高き飯田道一師が、廢物の古鐘八百余貫を蒐集して鑄造したる、実に重量一千余貫の大像なるが、初め道一師は之れを八事山に安置する筈なりしも、鑄造の爲め莫大の負債を生じ、為に同山に奉安する能はず。已むなく徳源に來りて廬山和尚に謀りたるに和尚の曰く、衲は銅像を引受くるに異論なければども借金迄は御免なりと。然りと雖も銅像は、借金持ちの銅像にて如何ともす可らざるに付き、廬山師一策を案じ語を改めて曰く、借金は銅像に依りて出来たる

ものなれば、その借金は積尊自身に弁済すべきなり。依りて之れを当山の境内に安置し、賽銭を以て元済の方法を講ず可しと。道一師此の提案に膝を打ち、妙々と呼んで大に悦び、早速此旨を同市の鑄造人たる岡谷惣助氏（貴族院議員）に謀りたる処、同氏も亦大に賛し、さらばとて氏自ら一千金を寄附されたり。兎角する内、同氏の一統よりも亦金二百円他にも此の美拳を聞きて寄附する人尠らず。斯くて六千八百円の負債も殆ど償却して、今は僅に六百余円の負債あるのみ。而して此の事世間に喧伝さるゝや、徳源のお釈迦様は借金ヌキのお釈迦様なりとて、忽ち名高くなり、昨今にては參詣人引きもぎらず、益々大繁盛なり。依て今回涅槃堂建築の議起り、予算金壹万円の予定にて宏壮なる御堂を建て、来年五月一日迄に全部竣工の予定にて、既に去る四月三日之れか起工式を挙行せり。凶案は本山の開山塔に習ひて輪奐の美を尽し、棟上の繪輪頭は銅の一丈二尺と云ふ大形のものを用ひ、代金一千二百円これ又岡谷氏の一寄進にて、又堂に用ゆる一切の瓦は小田井村松沢与七氏の寄附なりと云ふ。嗚呼釈

徳源寺の涅槃銅像について（川口）

尊の偉徳か將又盧山師の陰徳か近来珍らしき逸話ならずや。

とあり、八事山興正寺に安置することができなかったのは、鑄造のために莫大な負債が生じたからであった。その後、明治四十四年四月三日に徳源寺において涅槃堂の起工式が挙行された。

注

- (1) 『国史大辞典』第十三卷（平成四年四月 吉川弘文館）七三二頁の「明治時代」より要旨を採った。
- (2) 高楠順次郎「明治仏教の大勢」（『現代仏教』第百五号 昭和八年七月 現代仏教社）十一頁の要旨より採った。
- (3) 『梅千和尚』七頁では天保八年（一八三七）六月の誕生とあり、六十五頁の遷化では、明治四十二年（一九〇九）十一月十六日午後四時に七十八歳で円寂とある。しかし、天保八年く明治四十二年は七十三歳となるため、『郷土の人物誌』所収の誕生説を採った。
- (4) 演説会は「飯田道一氏の演説会」と題して、五月一日に中島郡稲沢町の地藏堂で行われたことが『能仁新報』第二一八号に紹介されている。